

## 序

本校は、筑波大学附属学校教育局の統括・調整の下、他の附属学校群とともに国立大学法人の附属学校として、国や地域における教育の実習・研究のリーダーシップを発揮することを使命としています。その中で附属駒場中・高等学校は、自由・闊達を校風としながら、挑戦し、創造し、貢献する生き方をめざすことを教育目標に掲げ、真のグローバルトップリーダーの育成を行っています。具体的には、学業・学校行事・部活動を通して、20年、30年先を見据えた人材育成を行いながら、将来構想の基本方針である3つの拠点すなわち「先導的教育拠点」、「教師教育拠点」、「国際教育拠点」の構築に取り組んでいます。

まず先導的教育拠点として、本校は文部科学省スーパーサイエンスハイスクール（SSH）に2002年度から指定を受け、現在その第4期を迎えています。ここでは、「国際社会に貢献する科学者・技術者の育成を目指した探求型学習システムの構築と教材開発」をテーマとして、探求型の学習教材やプログラムの開発と実践に取り組んできました。探求型の学習は、食料の安全保障や環境・資源の保全、地球温暖化の抑制、あるいはいまだに猛威を振るう新型コロナウイルスによる感染症など、世界規模で深刻化する様々な問題の解決に寄与できる人材の育成につながると考えています。また例年は高校2年生が7月に、中学3年生が2月にそれぞれ筑波大学を訪問し、事前に希望した大学研究室で学術研究の最先端に触れながら、大学教員による研究指導を受けています。

また教師教育拠点としては、教員の養成・研修のために年2回の教育実習生の受け入れ指導に加え、今年度で47回を迎えた教育研究会やSSHの一環でもある数学科教員研修会（隔年開催）、教員免許状更新講習会や附属学校実践演習など、教員養成から教員研修に至るまで、数多くの研究会や講習・実習の場を提供しています。特に教育実習では、前年度3月末開催の教育実習オリエンテーションや事前・事後指導、また大学教職科目等の開講においても、献身的な役割を果たしています。

さらに国際教育拠点として、教育のグローバル化のための国際交流を積極的に行っています。昨年末には台湾の台中市立台中第一高級中学との生徒研究交流会をオンラインで実施するとともに、交流協定の今後5年間の延長を締結いたしました。またアメリカやタイ、韓国などへの生徒の海外派遣を積極的に行うとともに、国際科学オリンピックへの日本代表としての参加で、輝かしい成績を残してきました。国内においても筑波大学教員研修留学生や台湾、タイ、中国、韓国など海外からの高校生派遣団との交流や合同授業、あるいはサイエンスダイアログ（日本学術振興会プログラム）やイングリッシュルーム（課外活動）の参加・開催などを通じて、生徒のみならず教員に対しても、自国や他国の文化の理解と尊重、学校全体の国際化の促進、附属学校としての国内外への貢献などについて考える機会を提供しています。

以上の3つの拠点構想の取り組みを中心とする本校教育の実践研究の成果をまとめたものが本論文集となります。今年度は、プロジェクト研究としての7教科・7テーマに加えて、新型コロナウイルス感染拡大の予防に奔走された生徒部の報告、そして5つの個人研究の成果がとりまとめられています。コロナ感染症、オンライン学習といったキーワードが散見されるのは、今年の報告書の特徴と言えるかもしれません。

国立大学法人の附属学校には、国や地域の教育に資する総合的な教育実践のための研究活動が要請されていますが、本論文集がそれに応えるものであることを願うとともに、これらの諸報告に対する関係各位の皆様のお叱りご指摘やご教示が、本校実践研究のより一層の深化の糧となることを申し添えまして、序文とさせていただきます。

2021年3月

筑波大学附属駒場中・高等学校  
校長 北村 豊